

# 蒼の軍人

星月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

力を持つがゆえに諦められず。

意志が強いがゆえに相容れず。

蒼の少年は紅の少女とは異なる道を歩み始めた。

# 目次

決別	1
再会の約束	8
蒼の軍人	22
道が重なる時	38



# 決別

ナリタ戦役。後の歴史にそう刻まれることとなるブリタニア軍、日本解放戦線、黒の騎士団の三つ巴の戦い。

戦いは開戦直後こそ機体性能と指揮系統で日本解放戦線を上回っていたブリタニア軍が優勢だった。だが突如の大地震により引き起こされた土砂崩れと黒の騎士団の奇襲により形成は逆転。さらに藤堂と彼が率いる四聖剣もこの戦場に参加すると膠着状態に陥った。

ブリタニア軍の新型ナイトメア・ランスロットの活躍もあって何とかブリタニア軍は黒の騎士団の猛攻を防ぎきる。

黒の騎士団のリーダーであるゼロは消耗戦を嫌い、速やかに撤退の指示を全軍に飛ばしたのだが。

その時、ライは一人近くで戦っている日本解放戦線の面々が危機に陥っている事に気づく。すぐにゼロに報告し救援を呼びかけるもののゼロは強く反発した。

『日本解放戦線には構うな！ 今不用意にブリタニア軍を刺激すれば、敵の意識は黒の騎士団に向いてしまう。物量ではブリタニアが勝るのだ。こちらが全滅する危険性も

ある。全軍、速やかにナリタ連山から撤退せよ！」

「……それが君の答えなのか。ならば」

まるで友軍である日本解放戦線を見捨てるかのような方針を取るゼロ。

部下であるライはそんな彼の方針に素直に従うことが出来なかった。

友軍の日本解放戦線を無視する事はできない。そうでなくても彼は先の土砂崩れという無茶苦茶な戦法を取るリーダーに疑問を懐いていたのだから。

「全員、速やかに撤退せよ。僕は敵の包囲を受けている日本解放戦線の救援に向かう」

「おい！　ゼロの命令は撤退だぞ！　逆らうつもりか!？」

『命令に従え。お前の一存で味方を危険に晒す覚悟があるというのか!』

「すでに今日の前で友軍が危機に陥っている。今救えるかもしれない危機と起こるかわからない危機だ。僕は前者を取る」

ゼロの発言に到底納得がいかなかったライは部下を先に撤収させると自分は制止の声を無視して進軍を続行。ブリタニア軍に包囲網を敷かれてしまった藤堂達日本解放戦線の救出を敢行する。

結果、ライの突撃を契機として無事に窮地を脱した藤堂は四聖剣と共にナリタ連山を脱出。

ライも彼らとの再会を約束すると先に撤退した騎士団を追って戦場を後にした。

「ライ。命令違反により君を拘束する」

「……ああ。好きにしてくれ」

だが命令違反を犯したライをゼロが見逃すわけがない。

合流した彼を待つていたのは非情な宣告。

独房に拘束されたライはゼロと短く、激しい問答を交わした。

民間人や日本解放戦線までも巻き込んだ作戦を実行したゼロ。彼を信用できなくなつてしまったライはゼロの責める言葉に怯む事無く批判を返し、彼の怒りを買う事になつた。

結果、ライは黒の騎士団を脱走することを決意する。これ以上ゼロのやり方についていくことはできない。彼の命令に従うことはできない。そう判断したのだ。

自分を慕ってくれた部下や共に戦ってくれた戦友には申し訳ない。しかし今ここで足を止めてしまえばきつと後悔する。

ライの決心は固かった。彼は独房を抜けて、ナリタの戦いで搭乗した一機の無頼にひっそりと乗り込んだ。

幸いにも機動キーは挿したままだった。

悠長にしている時間はない。早々にナイトメアを起動するとライは全速力でアジトを脱走。

荒野と化したゲットーへと走り出した。

「黒の騎士団各員に告げる。脱走者が現れた。繰り返す。脱走者が現れた！ すぐに追  
い、脱走者を捉えよ！」

ゼロの命令を受けた黒の騎士団員が追撃に移る。

突如の出来事である為か始動が遅い。加えて数もそう多くなかった。

加えて今はあの大战の直後だ。気の緩みもあつたのだろう。無頼の動きは遅い。  
これならば簡単に逃げ切れる。

そうでなくてもライのナイトメア操縦技術は黒の騎士団の中でも随一だ。彼を上回  
る技量を持つパイロットなどそうそういない。

ライはゲットーの入り組んだ地形を逆手に取って追つ手を振り切る。

郊外に出て、しばし黒の騎士団員達の出方を窺うために架橋下に身を潜めた。

どうやら先ほど背中を追っていた無頼は近くにいない。

無事に追撃を振り切つたと安堵した瞬間、突如目の前に紅色のナイトメアが重い音を  
立てて着地。鋭い刃をこちらに向けて制止した。

「紅蓮式。——カレンか」

たしかに騎士団内でもライの技量は随一だ。だが彼に並ぶものが一人だけいる。

黒の騎士団のエース、カレン。ライを黒の騎士団に誘つた彼女が、いる。



唯一追つてきたパイロットを理解するとライはコクピットを開く。カレンも彼に呼応してコクピットを開いた。

「ライ！ お願ひ、戻つて！」

「それはできない相談だ」

「どうして!? ようやくブリタニアとも渡り合えるようになったというのに。ゼロには私からも掛け合うから！」

「僕はゼロのやり方に疑心を持つている。彼をリーダーとして見る事はできない。かけたところ無駄なんだよカレン」

「ライ。……どうしても、駄目つて、言うの？」

ゆっくりと紡がれた問いかけに、ライは静かに頷いた。

——望まない否定の答えだ。彼女は悲しそうに目を細めた。

この表情をライが見るのは二度目である。かつてカレンがライを黒の騎士団に勧誘して、ゼロの誘いを断ろうとした時のことだ。あの時もカレンは同じ表情を浮かべていた。

思えばあの頃からライはゼロに対して半信半疑だったのかもしれない。リーダーの能力は優秀だとしても、彼の取る方針を認めることは中々難しかった。

カレンがいたからこそ、彼女の思いを無下には出来ないし騎士団に加入した。

だがゼロのやり方をハッキリと理解し、彼の戦いを目にした今。もうライは彼のあり方に賛同することはできないのだ。

たとえば、今ここでカレンの手を振り払う事になろうとも。

「そう。……なら！」

カレンはゆっくりと紅蓮の右腕をライへと向ける。

鋼鉄の爪は必殺の一撃を放つ紅蓮の切札だ。その威力はナリタの戦いで嫌と言うほど知らしめた。

その武器をカレンはライに向けている。

「……カレン。僕を殺すか？ ゼロに逆らう僕を」

「私は……私は、ゼロの為に！」

そのためならばどんな指示にも従う。どんな無茶な戦いにも望んでいく。

カレンの意志がヒシヒシと伝わってくる緊張が籠った声。

だがそんな声に反して、紅蓮の右腕はゆっくりと下がっていった。

「……今はまだ。でも、もしもあなたがゼロを害する敵として現れたなら。その時は！」  
きつと、彼女が迷うことはないのだろう。

カレンはその時こそきつとライの息の根を止める。

彼女の自慢の武器である、紅蓮式式で。彼女が誘った大切な相棒とも呼べた存在を。

学園や生徒会でも何度も長い時間、同じ時間を共有した彼を。

きつとカレンはそういう人物なのだ。

「カレン。……また、会えるさ」

「……ッ」

生きてさえいればきつと何度も会うことができる。たとえ良い出会いであろうとも、悪い出会いであろうとも。

ライの呟きにカレンは何も答えることが出来ない。

呆然と立ち尽くす彼女のすぐ横を、ライは通り抜ける。

すれ違う際に、寂しげに表情を歪める彼女の顔を忘れないようにと、何度も脳裏に刻みながら。

彼は黒の騎士団との決別を果たしたのだった。

## 再会の約束

黒の騎士団を抜けた後、ライは日本解放戦線の末席に加わった。

ギアスという絶対の力も使つて指揮官・片瀬に取り入った彼だが、そのもてなしは非常に厚かった。

元々彼が持つナイトメア操縦の腕に加え、藤堂や四聖剣を救ったという実績。高齢化が進む軍部に新たに加わる若い戦士。さらには彼が日本に古くから伝わる貴族の血筋であるということが判明すると、片瀬は歓喜に溢れた。

こうして日本解放戦線に無事に入隊できたライは少尉に任命される。

散り散りになっていった四聖剣や藤堂を無事に合流させるといふ功績を上げ、己の力を示していった。

その後は貴族の血筋という家系から支援を受けているキョウトとの繋ぎ役を任されることも多くなり。

訪れた先のキョウト、富士プラントで同じくキョウトから手厚い支援を受けている黒の騎士団と遭遇する機会が増え。

その中には、カレンと出会うことも少なくなかった。

「久しぶりだねカレン」

「あら。久しぶりね。そつちも元気そうで何よりだね」

「うん。カレンこそ」

脱走後、幾度か顔を会わせ話をしていく為にライが少尉に昇進したということはカレンもよく知っている。

変わらぬ働きぶりはライもカレンも同じだ。ブリタニア軍を相手に奮戦している。

その争いの中にはライが余計にゼロを信じられなくなるところもあったのだが。

何はともあれ二人の関係はそう険悪なものではなくこうして再会すればいつもの口調で話しかけるのだった。

「そういえば。日本解放戦線もそれなりに情報網を持っているわよね？」

「ナリタ連山を本拠地に敷いていたときほどではないけどね。でも今でも各地のレジスタンスグループと連絡を取り合っているし、情報は入っているよ」

「なら一つ聞きたいことがあるのだけど」

「いいかしら、と首を傾げるカレン。」

「お願い事とは珍しいなと考えつつ、ライは首を縦に振った。」

「ありがと。今人を探しているのだけど、あなたマオという男を知らない？」

「マオ？」

「ええそう。中華連邦からこの国に来ていたみたいなんだけど……」

カレンの口からは聞き覚えのない名前が飛び出した。

中華連邦といえはすぐ近くのアジアが誇る大国。ブリタニアに屈していないというだけでもそれだけの力を誇るかは想像できるだろう。

生憎ライにはそのような国との接点はない。

この時の彼は知る由もないのだが、後に中華連邦のある人物達と交流を持つ事になるのだが、まさか想像できるはずもなかった。

「いや、初めて聞く名前だ」

「そっか……」

「その男は何者なんだ？　ブリタニア軍の関係者ではなさそうだけど」

中華連邦から来たということはブリタニアに関与しているとは考えにくい。

しかしそれならばカレンがその人物を探す理由も見つからない。

何故だと問い返すとカレンも返答に困ってしまう。彼女自身、完全に事情を把握し切れていないようだった。

「私も詳しくはわからない。でも、どうやらその男はゼロをつけ狙っているみたいなの」

「ゼロを？」

「うん。一度襲撃を受けたみたいで。それでゼロから騎士団にそのマオという男の行方

を探るように指令が出されたのよ」

それを聞いてしばしライは黙り込んだ。

首元に手を当てて、真剣に何かを考えている様子。

その熱意に当てられてカレンも口を挟む事はせず、彼の考えがまとまるまでは静かにしてようと彼の顔を覗き込む。軍服を着ているためか非常に様になっていた。

思考時間は10秒ほどで済んだ。ライは手の力を緩めると、ポツリと考えを呟いた。

「……ゼロは中華連邦にいた頃があったのか？」

「え？」

「考えてみなよ。中華連邦にとってゼロの存在は決して悪いものではない。ブリタニア、EUと三つどもえの世界を展開している」

「そうね。ブリタニアが一步リードしている状態で対ブリタニア勢力は少しでも欲しい」

「そうだ。騎士団の存在はブリタニアの勢力に対抗する、中華連邦にとっては願ってもない存在だ。ならば手を組むあるいは利用することは考えても、少なくとも中華連邦が国の命令でゼロを害そうとは考えないはずだ」

「じゃあ、マオという男は個人の理由で？ それで中華連邦でゼロと合っていたかもしれないってこと？」

「この日本に来てからの可能性もあるけれどね。でも、味方でさえ行方を掴めないゼロと接触するとは考えにくい」

「確かにそうね」

つい可笑しくて笑みがこぼれてしまう。

親衛隊隊長であるカレンでさえゼロの騎士団以外での生活は全く知らないのだ。

素顔さえ明かさなない仮面の男。謎に満ちている彼の本性を、別の国の人間が知っているとは到底考えられない。

ならば以前から知っている人物か。

そう考えるライの意見は的を得ているものだった。

「でも一体何のために……」

「彼の活躍を妬んでいるか、あるいは何かゼロが個人的に恨まれるような事をしたのか……」

「可能性は色々ありそうね」

理由についてはこれ以上語っても推論の域を出ない。

だがマオがゼロと関係している人物かもしれないという情報は非常に重要だ。ゼロに聞いてみればマオという人物の行動パターンも読めるかもしれない。中華連邦と繋がるカードになる可能性もある。



進展が起こらない状況下で、ライの意見を聞けたのはカレンにとって非常に大きなものだった。

「ありがとう。こちらもその線も考慮して探してみるわ」

「……カレン」

「なに？」

「無線の波長は、僕がいた頃とは変わっているよな？」

「え？」

カレンは間の抜けた声を零した。当然の反応だ。今ライにこのような発言をされて、即座に答えられるような人間が果たしているだろうか。

言葉の真意を理解できず、カレンは態度を一転。視線を厳しくし語気を強めてライに問いかける。

「どうしてそんなことを聞くの？」

「警戒しなくていい。こちらでも何か分かり次第伝えようと思っただ。ゼロの事はまだ信じられないが、君達が不利になるようなことは避けたい。僕達は日本の解放を願う同志だからね」

心からの本心だった。

ゼロを信じられなくなったとは言っても、黒の騎士団員のことを信じられなくなった

というわけではない。

相手がカレンであるというのならば尚更だ。

ライにとってカレンが大切な存在であるということは不変の事実なのだから。

「……残念ね。もう変わっているわ。当たり前前でしょ？」

「じゃあ」

「そして貴方に変わったものを教えるつもりもない。仲間ではない人に情報を漏らして、騎士団に害が及ばないとは限らない。貴方ならそれくらいわかるでしょ？」

そんなライに対し、カレンの答えは冷たいものだった。

もはや二人は違う組織に所属しているのだ。

そう再認識させるような、突き放すような態度。分かっていることとはいえ、ライは寂しげな笑みを浮かべた。

「うん。そうだね、その通りだ」

「ッ……」

そんな様子を見て、カレンも表情が暗くなる。

違う。本当はこんなことは言いたくないはずなのに。本音を打ち明けるには現実がかけ離れすぎていた。

気まずい空気が場を支配する。

いつもよりもずっと長く感じる時が流れる中、沈黙を破ったのはカレンの方だった。

「……私の携帯の番号やアドレスはそのままよ」

「え？」

「黒の騎士団の紅月カレンとして貴方と連絡をとるわけにはいかない。でもただの紅月カレンなら、あるいはカレンシユタツトフェルトとしてなら、私は貴方と話をしてもいいって思う」

これがカレンにできる最大限の譲歩だった。

ゼロに知られれば『甘いな』と一言で斬り捨てられるかもしれない。あるいは『裏切り者と内通しているのか』と批判されるかもしれない。

だが、それでも。それでも、ライと言う人物は。カレンにとっても大切な人だから。

このまま別れることは嫌だった。だから言葉遊びだとしても確固たるつながりが欲しかった。

「……ありがとう」

カレンの意図を理解して、ライはいつもの人懐こい綺麗な笑みを浮かべる。

思わずカレンの頬が緩みかけて、恥ずかしげに目を逸らした。

「それじゃあ、私はそろそろ行くわね。さようなら、少尉さん」

別れ際にもう一度お互いの立ち位置を確認するようにあえてそう呼んで。

「また会えるさ。カレン」

ライは変わらぬ優しい声色で彼女に再会を約束する。

窺う事はできないが、カレンもきつと笑っている。

そう思つてライも反対側の通路を通つて富士プラントを後にした。

それからしばし月日は流れて。

ライは己の出自に関する重大な結果を知ることとなった。

以前少しでも記憶を探る頼りになればと行つた血液検査。検査はキョウトの支援もあつてかなり詳しい分析が行われていたのだが、その結果は驚きの内容であつた。

ライは日本人とブリタニア人のハーフ。しかも貴族の血筋であり、皇家とも遠い親戚にあたるとのことだった。

名家の血を引く若い戦士が日本の開放の為にと戦いに馳せ参じた。これは軍にとつては非常に意味のあることだ。日本解放戦線の面々の士気は大いに高まつた。

当然ライ本人にとつても嬉しい事である。今まで信じていた思いが、戦いが無駄ではなかつた。何よりもそう信じて疑わなかつた彼女の声が正しかつたのだ。

血筋を知ったライは、彼女にも話をしようと決意し、久々にアッシュフォード学園に登校。

携帯端末で連絡を取ると休み時間に無人の屋上へと赴き。そして、カレンと対面することとなった。

「あら。学校で会うなんて久しぶりね」

「そうだね。カレンではないけれど、こうして登校するなんて懐かしい気分だよ」

「私は病気がちだから、よ？ 誰かさん達みたいにならなくて休んだりはしないわ」

「……ああ。その通りだ」

どうやら今でも学園で演じている姿は変わらないらしい。

病弱で大人しいお嬢様。気が弱そうな雰囲気からは、戦場で紅蓮を操縦してリタ二軍を蹴散らしているとは到底想像できない。

世間体の良い性格を完全に演じている姿には笑みを零してしまいそうだが、ライは何とか踏ん張った。

下手に彼女の気分を害するのは良くない。今日は彼女と大切な話をする為に来たのだから。

「それで？ 話があるということだけど、どうしたの？」

「……君にだけは話したいと思ったんだ。重要な話だ。真面目に聞いて欲しい」

「何かしら。あなたが戻ってきてくれるというのなら、これ以上嬉しい事はないのだけ  
れど」

「残念ながら違う。 فقط」

「ただどある意味では君が嬉しいと感じてくれることなのかもしれない。」

「一つ間を置いてライは続けた。」

「かつて君が僕に言っていたことを覚えているかい？」

「私があなたに言った事？」

「僕はきつと日本人だと。そう言ってくれただろう」

「カレンは小さく寂しげに頷いた。」

「大きな決断となった日のことだ。忘れるはずもない。」

「彼女が覚えてくれていると再確認し、ライは本題へと移る。」

「こちらで、日本解放戦線で調べていた結果が出たんだ。僕は、日本人とブリタニア人の  
ハーフだった」

「……えっ」

「詳しくはわかっていないけれど、皇家とも遠い親戚にあたるそうだよ」

「ちよつ、ちよつと待ってよ。それじゃあつまり」

「信じられないのだろうか。」

困惑しながら問いかけてくるカレンに対し、ライは大きく頷いた。

つまりライもカレンと同じ存在なのであると。二人は同じ立場だったと打ち明けた。肯定を得て、彼女は動揺しているようにゆっくりと言葉を紡ぐ。

「そう、だったんだ。ハーフ、だったのね。私と同じ」

「そうだよ。カレンと同じだ。君の言うとおりだった」

ライは本当に嬉しそうに語る。

元々はカレンが日本人であると信じたからこそ始まった記憶探し。そこから全てが始まった。

その思いは正しく実をむすんだ。

だからこそこの事実を誰よりも早く彼女に伝えたかった。

だが、ライの表情に反してカレンの笑みは暗い。

「ごめんなさい。普通なら喜ぶべきなんだろうし、私だって前から望んでいたことなんだけれど」

「うん」

「本当よ。この思いに偽りなんてない。そう、望んでいたの。望んでいたはずなのよ」

「わかっている。わかっているよ」

「でも、今は素直にあなたの出生のことを喜べない。同じ服を身に纏ってあなたの傍に

いたならば、きっと違っていたはずなのに。どうしてかしら」

羽織る服が変わってしまっただけなのに、懐く感情はこうも違ってしまふ。

二人が目指すものは変わっていない。変わったのは立場だけだ。その立場が、彼女を惑わせる。

喜ぶべきことなのに。喜ばなければいけないはずなのに。

二人とも同じ境遇であると知って、何故か寂しさの方が勝ってしまう。

どうしてもつと早くに知ることが出来なかったのだろうか。あの時無理やりにもライを引きとめることができなかつたのか。後悔せずにはいられなかつたのだ。

そう困惑するカレンの様子を見て、ライはクスリと笑った。

「それが普通の反応だよ」

「ライ……」

「僕がただ君に知らせたかっただけだ。カレンの言っていたことが本当だったんだって。

『あなたはきつと日本人よ』って。そう言つて僕を黒の騎士団への加入を推薦してくれたカレンにだけは、知らせておきたかつたんだ」

ライは優しくカレンを諭す。これ以上彼女が負担に感じないように。

「だから、ありがとう。僕を日本人だと信じてくれて」



「ライ……」

苦しそうに顔を俯けるカレンを、ライはそつと抱き寄せた。

涙が零れないようにと、かすれた声を出さないようにと必死に耐える彼女の動きには気がつかないフリをして。彼女の震える体を静かに支え続けた。

## 蒼の軍人

四聖剣、藤堂の合流。新型ナイトメア・月下の配備。

ようやく日本解放戦線が戦力の再集結、再編成を済ませた頃に、それは訪れた。

イシカワ戦役。戦力を立て直し再編成させたのはブリタニア軍も同じであった。イシカワゲットーの日本解放戦線本拠地にコーネリア率いる精鋭部隊が押し寄せてきたのである。

戦いは藤堂が展開する防衛計画により日本解放戦線が前線レベルで優位に立っていた。

しかし本陣が攻撃を受けると片瀬が早々に総退却の指示を出してしまう。本陣が逸早く戦線を離脱した事により戦線は崩壊。日本解放戦線は総崩れとなり、イシカワから撤退することとなる。

ブリタニア軍に大打撃を与えた事から『巖島の奇跡の再来』と呼ばれているそうだが、軍内の空気は非常に重苦しい。

相手をあと一步のところまで追い詰めておきながら指揮官の指示で一転壊滅の危機に陥ってしまったのだ。指揮官である片瀬への風当たりは厳しいものだ。

軍は片瀬の海外逃亡論、藤堂の国内抵抗論に別れることとなる。

ライは黒の騎士団を例に出して藤堂を指示した。すると片瀬はこの態度に激怒し、意見に逆らう藤堂と四聖剣、ライの六名を無視して西進。中華連邦に亡命中の澤崎達との合流を選択する。

追放される形となつた六人はライの提案の元、キョウトへと訪れる。

キョウトの支援を受ければまだ立ち上がれる。キョウトとて藤堂達をそう易々と見捨てるようなことはしないだろう。

そう考えての行動だったのだが。

そこでライたちは予想もしない再会を果たす事となつたのである。

「待ちかねたよ」

富士プラントで藤堂達を待っていたのはゼロだった。

「ゼロ……」

「何故、ここに」

「ゼロ様とは黒の騎士団の支援態勢のことでお話していたのです。藤堂様方も時期いらつしやるとお話したところ、ぜひとも皆様に合いたいと」

疑問に答えたのはゼロの傍に立つ神楽耶だった。

決して悪気はないのだろう。そもそも、ライが辞めた理由をよく知らなければ黒の騎

士団と藤堂達を会わせることに躊躇うものはいない。お互いが日本の開放に尽力し、ブリタニアと戦い続けている組織だ。

その実力者同士の邂逅。おそらく神楽耶はただより仲を深め、力を合わせて欲しい。そう考えたのだろう。

「話は聞かせてもらったよ。国外に逃亡する片瀬は君たちの意見を受け入れなかった。いよいよ君たちの居場所はなくなったというわけだ」

「ツ……」

「あの時の言葉、こんなに早く実現するとは思わなかったが」

「『互いの力が必要ならば』、か？」

かつて、藤堂達とゼロがかわした会話が思い起こされる。

前にもゼロが黒の騎士団に藤堂達を勧誘した時があった。

あの時は立場もあって誘いに答えることはできないと答えていた。そしてこの先、互いの力が必要となったならば、目指すものが同じであるならば、その時は協力も惜しまないと。

「そう。もともと私は君達の力を欲している。あとは、君達次第ということだ！」

「うむ……」

「ライ。君にも異論はなからう？ 我々黒の騎士団に合流することに」

藤堂は迷っているようだ。

あと一押しすれば条件は達成される。そう考えたのだろう。ゼロはライへと話を振った。

日本解放戦線でも尽力し、あらゆる功績を上げてきたライだ。血筋のこともあつて発言力は大きなもの。

黒の騎士団に所属していた彼が応じれば、あとは障害となるものは何も無い。

「ライ、お願い。私、貴方となら……」

護衛についてきているのであろう、カレンもまたライに懇願する。

彼女の寂しげな表情に一瞬心が揺れる。甘えても許されるかと決意が鈍る。

だがもはや今のライは軍人だ。自分の気を一挙に引き締めて断固とした意志を固めた。

ゼロの期待、カレンの希望を受けて。最後の一手にと選ばれたライは――

「悪いがゼロ、君を信用することはとても出来ない」

黒の騎士団の提案を即座に否定する。

「ほう。意外と執念深い男だな」

「ライ……!」

「僕自身の事じゃない」

「なんだと?」

「ゼロ、君にひとつ質問をしたい。このことだけには、嘘偽り無く答えてほしい」  
「……………いいだろう」

事の重大さを察したのだろう。もとよりライを説得できなければ藤堂達を招き入れることは出来ないと考えていたのだ。迷いつつもゼロはライの問答を受け入れることとした。

「あの時、前にも片瀬少将が国外脱出を図ったとき」

ライが話しながら脳裏に思い描いたのは、突然目の前で爆発が起きた光景だ。彼が撃破を狙ったポートマンの大破とは別のものから生じた強烈な爆発。

あれを見てライは一つの確信を持っていた。そしてそれが事実なら、ゼロを信用できるはずもないと。

「タンカーを爆破しようとしたのはゼロ、君じゃないのか?」

「ツ……………」

「え!?!」

「タンカー? まさか、あの時の爆発が……………!?!」

ゼロは何も答えない。カレンは驚愕に目を見開き、ライとゼロに視線を行き来させている。少なくとも彼女には知らされていなかったようだ。1ゼロの独断だったのとも

考えられる。

四聖剣の中、唯一ライと共に戦いに参加していた千葉は何事かを藤堂に耳打ちする。千葉も気付いたのだろう。あの時の、タンカーを狙った爆発について。

「あの時、解放戦線のタンカーの進路上には爆弾が仕掛けられていた。僕がちようど同じ方向にいたポートマンを破壊しなければ、僕も片瀬少将も——いや違うな。解放戦線はあの場で終わっていた」

厳しい指摘を前にゼロは反論することさえしない。

口を挟まないのはこれ以上の事態の悪化を防ごうといっているのだろうか。

ライは返答がない事を察し、さらに己の分析を展開する。

「国外脱出を図った解放戦線に爆弾を仕掛ける理由はない。ブリタニア軍も同じだ。そんなことするくらいなら、最初から空爆で終わりだからな。そうなると、あの爆弾は第三者の介入によるものと考えるのが無難だ。そして、あの爆弾の爆発と同時に、ブリタニア軍本陣に攻め入った黒の騎士団。非常にタイミングが良かった。頃合を見計らっていたような動きだったよ。随分出来すぎた話だとは思わないか？」

そう、普通ならありえない。黒の騎士団が——いや、ゼロが爆弾を仕掛けない限りは。ゼロが解放戦線を囮としてブリタニア軍を攻めようとしないう限りは。

言外にゼロを強く批判するライ。彼の後方に立っている藤堂達の視線が一段と厳し

くなるのを感じられた。

「ゼロ、君に聞きたい。君の目的は日本の解放ではないな？」

そしてライはゼロの本質を突く。

「君が求めるのはあくまで自軍、黒の騎士団の勝利。だからこそ一般人を、味方をも巻き込むような作戦さえも実行できるんじゃないのか!？」

逃げる事は許さない。今度こそ考えを明らかにさせてみせると、強く問い詰めた。

「僕はそれを許せない! どうなんだ、ゼロ? 答える!」

「……答える必要はないな」

ようやくゼロが言葉を発したのは、肯定を意味する曖昧なものだった。

ライは息を一つ零した。落胆がこもったものだった。

これでゼロが自分を納得させるよう話をしてくれれば、あるいはもう一度手を取り合えたかもしれないというのに。やはり可能性は殆どなかったのだ。そう自分に言い聞かせるしかなかった。

「そうか。残念だよ」

「ぜ、ゼロ。それじゃあ本当に……」

カレンも言葉を震わせてゼロを見た。だが彼女を満足させる答えをゼロは持っていない。



ライはそんな二人から藤堂達へと視線を戻し、彼らに頭を下げた。

「中佐、そして四聖劍の方々。私などが勝手に話を進めてしまい、申し訳ありません。ですが自分はゼロを信用できません。もし中佐方が騎士団に合流すると仰るならば、申し訳ありませんが、私は中佐達と道を同じくすることはできません」

「……いや、少尉。むしろよくぞ言ってくれた」

藤堂はライの肩をポンと叩き、彼の前に出てゼロに告げる。

「ゼロ、今回も君の申し出に応えてやることはできないようだ」

「ッ……！」

「まあ。力を合わせてはもらえないので？ 残念ですわ」

「……申し訳ありません、神楽様」

善意から心底協力を祈ってくれた神楽に今一度ライは頭を下げる。

信頼を置いてくれた彼女には申し訳なかったが、どうしてもこれだけは譲れない。

頭を上げて神楽と挨拶を済ませると今度はゼロからライに名前を呼ばれた。

「ライ……」

「何だ？」

「次に会うときは、恐らく」

「そうだな。覚悟はしておくよ」

最悪の展開を迎えさせたのだ。ゼロの怒りは計り知れない。

短い決別の会話を終えて、そして今度は迷いが見えるカレンへと視線を向けた。

「カレン……」

「ら、ライ。私、私は」

「君は君が信じる道を進め。僕も僕が信じる道を進む」

その進み道が重なってくればその時は迷わずに君の手を取ろう。そう続けたかったけれど、ライは己の行く末を察してしまったが為に先の言葉を飲み込んだ。

「だから。……さようなら。カレン」

今度はまた会えると言う事はできなかつた。

「ライ……」

『もう一度と君達と会うことない』。

言葉の真意を感じ取ったのだろう。名前を呼ぶカレンの声は、涙で掠れてしまっていた。

本当は今すぐに涙をふき取って声をかけたいというのに。

ライは表情一つ変えずに、振り返ることもせず、富士プラントを後にした。

「……………さようなら」

声が届かない廊下に入って、ライはもう一度心を込めて愛する者へ別れを告げた。

富士プラントを後にすると、藤堂達は西進。先に中華連邦に渡った片瀬達との合流を  
図った。

騎士団との合流も果たせずキョウトの支援も得られない以上はこうするほかない。  
苦汁の選択だった。

途中で休憩と補給もかねながら九州を目指していたのだが。道中でライは千葉に呼  
び出されていた。

「少尉、本当にあれでよかったのか？」

「何がですか？」

「……好いていたのではないのか？ あの女のことを」

「あの女？」

「フジプラントにゼロと共にいた女のことだ。以前、私がお前と一緒に会った事もあつ  
ただらう」

「カレンのことですか」

千葉が小さく頷いた。彼女にしては珍しく覇気が感じられない。おそらくは純粹に  
ライを心配してのことなのだろう。

問われたライはすぐに答えることができず、しばし頭を悩ませた。

「……わかりません。好きになるとか僕はそういう経験が少ないので」

「そうか」

「はい。ですが」

「ですが何だ？」

意味深に言葉を区切るライ。まだ振り切れていないのだろう。彼の心中を感じ取った千葉はそれ以上深く問い詰めることはせず、次の言葉を待った。

「僕が騎士団に入ったのは彼女のことを信じたからです。誰よりも彼女のことは信じようと思ひ、共に同じ道を進もうと思ひ。そして……どんなことが起ころうとも彼女だけは守りたいと、そう思ひました。」

「……それを好んでいるというのだ。馬鹿者」

そういわれてしまえば、ライも「そうかもしれません」と同調した。

苦笑を浮かべてしまうのは仕方がないことだろう。自分の気持ちにこれほどまで鈍感であるとは笑ってしまう。

だが千葉の表情は暗いままだ。申し訳ないという気持ちで顔に出ているようだった。

おそらく、ライのように元来から解放戦線に所属しているわけでもない学生がこのような結果がわかっている戦いに巻き込まれるのを悔しく思っているのだろう。

「少尉。今からでも遅くはない。お前はまだ若い。黒の騎士団に」  
「それ以上は言わないで下さい」

千葉の声を遮って、ライは立ち上がって言う。

「中尉。僕は、もうゼロと決別しました。彼とわかりあうことはもうないでしょう。そして彼が黒の騎士団を率いている以上、そのエースであるカレンとも袂を分かつことは必然です」

「少尉。お前」

「僕とて日本解放戦線に所属する軍人です。軍人が一時の感情に流されて軍隊を裏切るわけにはいきません」

ライの心は既に決まっている。あのナリタの戦いで彼は決意したのだから。

そして今ここにいるのは少尉を与えられた軍人。今さら組織を、仲間を見捨てることなど出来ない。

「……そうだな。お前も立派な軍人だ」

「ありがとうございます」

本当に今日は珍しい日だ。

千葉に褒められて、場違いにもそう思うライであった。

「ただ、先ほどの言葉、一つ間違いが有るので訂正しておきます」

「何だ？」

「中尉は僕を若いと仰いましたが、中尉も僕を若いと仰るような方ではないでしょう？  
まだ若く美しい。そのように仰らないで下さい」

「なっ。か、からかうなばか者！」

「からかつてなんていけませんよ」

羞恥心からようやくいつもの調子を取り戻した千葉。

軽く小突くかれて、しかしライも彼女に呼応して笑みを浮かべている。

こんな時間が何時までも続いてくれればいいのに。

そう願っても、戦いの時は刻一刻と迫っていく。

そしてどうやらカレンとの関係を気にしていたのは千葉だけではなかったらしい。

千葉との会話の翌日、今度は卜部から同じような切り出しを受けた。

「ライ。あの時いた赤髪のパイロットは少尉の女だろうか？」

しかもこちらにいたっては断定であった。

本人でさえ自覚できていなかったというのに、初めてみた卜部がこう語るのだから他の周囲の人間はそう認識していたのかもしれない。

「付き合っていないですよ。たしかに、彼女とはかなり仲はよかったと思いますが」

「なんだそうなのか。随分と親しげな感じに見えたぞ」

「僕を黒の騎士団に誘ってくれた人でもありませんから」

「ほう。なるほど、それじゃあ尚更大切な存在というわけだ」

そう言った直後、卜部の表情が曇り始めた。冷やかしはここまで、ということだろう。

「……本当ならばお前には、ここから離れておけつて言いたいんだけどな。だが正直な話、今の日本解放戦線は深刻な人手不足だ。優秀な士官は一人でもいるに越した事はない」

「はい。イシカワでの敗戦もあつて余計に人材の確保は急務になっております」

「その通りだ。そしてお前さんは紛れもなく優秀な逸材だ。抜けてもらうのは不味い」

日本解放戦線はナリタの戦いで多くの人材を失った。藤堂や日本解放戦線といった主力は何とか生き延びているものの、イシカワでの敗戦によって再び戦力は半減している。

そんな中、ライの存在は非常に大きなものだ。

藤堂を含む月下を配備された士官の中で唯一の蒼い専用機を操り、多くの戦功を上げてきたパイロット。しかも貴族の血筋を組むという実力以外の面でも大きな役割を担っている。

彼がいなくなれば組織の戦力ならびに求心力は大きく低下する。組織の士気も大き

く下がることが容易に想像できた。

「……どうか、最後まで戦ってくれと命令する俺達を許して欲しい」

上官らしくない懇願だ。

ト部とて若者には可能な限り好きなものと共にいてほしいと思っている。しかし現状ライにはいなくなつては困るのだ。日本解放戦線に彼はかせない存在。だから彼は許しを乞う。

「ありがとうございます。ト部中尉」

「おいおい。何で礼を言うんだ？ お前話を聞いていたか？ 俺はお前に戦いを強要したんだぞ」

「もしもここで中尉が『ここから離れろ』と命令されるならば、僕は命令に逆らわなければなりませんでした」

想像に反して礼を言うライにト部は思わず苦笑した。だが続いた返答からト部が予想もしていなかった彼の覚悟が溢れるほど伝わってくる。

「さすがに上官の命令に背くのは、あまりやりたくないことですから」

「少尉」

「だからありがとうございます。僕を共に戦わせてください」

「……ああ。こつちこそありがとうございます」



幾分か気が晴れた気がした。

そしてこの戦いが終わった後、どうかこの少年にも平穩が訪れるようにとト部は願った。

## 道が重なる時

藤堂やその部下達が中華連邦軍との合流を果たしたとの情報が入って数時間。

黒の騎士団のアジトではゼロが司令室にこもり、作戦を立てていた。

(中華連邦軍はナイトメア性能ではブリタニア軍に大きく劣る。しかし物量で勝ることに加え、キュウシユウ海域は大荒れの状況。コーネリアは上陸作戦の強行に二の足を踏んでいる。藤堂達も合流した以上、簡単に落とすことは難しい)

中華連邦軍はキュウシユウの要塞と呼ばれるフクオカ基地を占領。瞬く間にキュウシユウ全域へと支配領域を広げ、ブリタニアから独立。旧日本政府の官房長官であった澤崎が日本の再興を宣言していた。

これ以上中華連邦の介入を許せないブリタニア軍。

エリアー本土のコーネリアは討伐軍を編成するも連合軍の抵抗と悪天候が重なって攻略に失敗してしまう。

この間に日本国軍はキュウシユウの備えを完璧にするだろう。日本国を攻め落とすことはより困難となる。

だが独立したといっても兵も装備も全て中華連邦の借り物。それを使って独立した

日本も所詮は借り物に過ぎない。

ゼロは再興した日本をそう斬り捨て、黒の騎士団全軍を率いて中華連邦軍を討伐することを決定。

潜水艦に搭乗してキユウシユウへと向かっていた。

「待っているライ。俺の策を無駄にさせた報い、受けてもらう」

仮面を外した本当の顔、ルルーシユが一人眩いた。

かつての友という感情はすでになくなっていく。ライによって今まで漏洩を防いでいた作戦の真意が読まれ、藤堂達との合流を阻まれたばかりかカレン達からの求心力も減ったのだ。これほどの妨害を受けてはルルーシユもライに容赦を出来るはずがない。

仮に藤堂達が黒の騎士団に下ろうとも、ライだけは合流を許さない。そう考えてしまふほどに。

ライは優秀な戦力だが、藤堂のように人望を持つていない。反抗心をもつた力を持ちすぎると部下というのは危険なものだ。

できることならばこの戦いで排除してまおう。

そう冷酷な思考を浮かべた直後、部屋の扉がノックされる。

「私だ。誰だ？」

「カレンです。今、お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「カレン？ 少し待ってくれ。……入っただいぞ」

「失礼します」

相手を確認するとルルーシユはゼロの仮面を被りなおし、入出の許可を与えた。

カレンが重苦しい表情を浮かべていた。無理もない。彼女が少なからず大切に想っていた相手と戦うのだ。しかも今までとは違い、相手も覚悟を決めている。

これが最後の出会いとなるかもしれない。そう理解しているのだろう。

「どうした？ キュウシユウでの戦いでは君の働きは必要不可欠となるだろう。今はゆっくりと鋭気を養ってもらいたいのだが」

「ライのことです」

「……ああ。そうだろうな」

「どうしても、彼を、討たなければ、ならないのでしょうか？」

ゆっくりと紡がれた問いに、ゼロは即座に頷いた。

彼女の迷いを打ち消すように。覚悟を固めさせるように。

「それが必要な事だ。君も以前のフジプラントで交わした会話でわかっただろう？ すでに彼の気持ちは固い。ライが我ら黒の騎士団に加わるということはもうないのだ」

「ですが、ゼロは藤堂さんや四聖剣の方々を迎える準備はあるとも仰いました」

「当然だ。彼らとライでは影響力が違う。奇跡の藤堂、その直属の部下として日本人に

慕われている彼らが黒の騎士団に加われれば、戦わずとも存在だけで日本人へ与える希望がある。それはライにはないものだ」

その人物が持つている知名度のようなもの。

藤堂達はこれまでも多くの戦果を挙げて日本人を勇気付けてきた。彼らが黒の騎士団に属することとなればその恩恵は黒の騎士団にも向けられる。

しかしライが加わったところでそれはないとゼロは考えている。

命令に忠実に従うならば貴重だが、そうでなければ魅力は半減以下。無理してまで迎え入れる価値はない。

「いえ、彼にもありません」

「何?」

「ゼロ。これから私の話すことで、どうか考えを改めてはいただけませんか?」

「……いいだろう。聞かせてもらおうか。君が懐いている彼の力というものを」

だがカレンはそう思っていない。

まだ機会はなくなっていない。もう一度ライを引きいれようと、カレンはゼロに意見する。

納得できる材料があるというのなら、再考の余地は十分ある。

ゼロはどっしりと構えてカレンの進言を受け止めた。

キュウシユウを選占拠した日本国軍。

ようやく手に入れた独立に加え、ブリタニアの第一陣の猛攻を防ぎきったことで士気はさらに高まった。

藤堂達は喜びも束の間にすぐさま次の防衛に備えて準備を進めている。

戦歴豊富な彼らは気づいているのだろう。この独立は真の日本開放ではなく、しかも長く続くものではないということに。喜びに浸っている首脳陣を冷やかな目で見据えていた。

そしてその予感は的中する。

コーネリア率いるブリタニア軍が悪天候に苦しむも上陸作戦を強行。ランスロットを先頭にキュウシユウへの上陸を成功させたのだ。

さらにゼロが黒の騎士団を率いてこの戦いに参戦。日本国軍の本陣目掛けて突撃を仕掛けた。

「黒の騎士団までこのキュウシユウに!?!」

「ゼロ……」

日本国軍は両軍の迎撃に全力を注ぐ事となった。

主戦力が集うフクオカ基地を中心に、キュウシユウ北部の各地で激戦が行われた。

ブリタニア軍と黒の騎士団の波状攻撃を前に上陸軍の防衛体制は長く保つ事はできなかった。

ナイトメア性能に劣るガンルウは次々と落とされていく。次々と防衛計画が破綻していく中では唯一の対抗手段であった解放戦線の残存戦力の活躍は焼け石に水であった。

散り散りとなっていく友軍を纏めている藤堂も、この戦局を覆すだけの策は見出すことが出来ない。

戦力を当てにされている為に戦力が分散してしまい反攻するだけの戦力が整っていないのだ。

「藤堂中佐！」

付近のブリタニア軍を一掃し、戦局を見定めていると蒼い月下が近づいてくる。ライの専用機だ。

「少尉か。無事だったか」

「はっ。中佐、すぐにこのキュウシユウ地区より脱出を。まもなく敵軍が迫ってまいり

ます」

「撤退だど？ まだ片瀬少将達も残っているというのか？」

合流するや否や撤退を促すライ。

苦戦が続き、本陣も未だにこの戦地から脱出していないのが現状だ。

まだこの場から離れるわけにはいかない。そう続ける藤堂にライは説得を試みる。

「先ほど我が本陣にガヴェインと白カプトが向かっていると情報が入りました。本陣は間もなく落ちるでしょう。そうなれば撤退も容易ではなくなります」

「しかし……！」

『報告！ 西の連絡棟がブリタニア軍に落とされました！』

「なにつ!？」

『敵は勢いに乗じてさらに進軍しています！』

まだ決断に至れない藤堂の下にさらに状況が悪化した知らせが入った。

西の防衛拠点が落とされた。これで各部隊との連絡が困難を極まったばかりか、敵が西から防衛網を突破し挟撃を可能となってしまう。

これ以上この場に長いはできない。ライの言うとおりとなっていた。

「中佐は四聖剣の方々と連絡、合流してください。南下すればまだ残存兵力との合流、脱出は可能です」



「少尉、君はどうするつもりだ？」

「僕は西から進撃を続けている部隊の迎撃に向かいます。時間稼ぎにはなるでしょう。その間に、どうか脱出を！」

ライは蒼の月下を西へと向けた。その動きに迷いはない。

本当ならば自分が向かいたところだが部隊を纏める能力は藤堂の方が上だ。ライもそれをわかっていて殿の任務を引き受けたのだろう。正しい選択を即座に決断できるその力を頼もしく、悲しくも思った。

「少尉」

「はっ」

「このような所で命を落とすなよ」

「……全力を尽くします」

せめて生き残るようにと命令し、藤堂は単騎味方の元へ走る。

ライも背中を向けてブリタニア軍の部隊へと突進した。

まず目に移ったのはサザーランド五機で編成された小隊だった。

拠点を陥落したことで浮かれているのか勝利を確信しているのか、最高速度を維持して進んでいる。

（弾薬ももう残りわずかか。エナジーファイラーも多くはない。しかし！）

「舐めるなよブリタニア軍。——日本開放戦線少尉、ライ。推して参る！」  
廻転刃刀を逆手に持ち、サザーランドを迎撃する。

接近に気づいた敵がアサルトライフルを月下へ向けて銃撃を開始。

ライは左右に最小限の小刻みな動きで銃弾を全て回避するという荒業を見せると、怯んだ敵に刃を振るった。

廻転刃刀が先頭の一機の頸部を刎ねた。さらに振り返り様に右に立つサザーランドの胴体を真つ二つに切り裂く。

立ち直った他の機体がアサルトライフルを向けると、ライはスラッシュハーケンを發射。アサルトライフルを叩き落して懐に潜り込む。刃を突き刺し、敵を無力化した。

そして沈黙した機体を盾として残った機体の銃撃を防ぎきる。

今度はスラッシュハーケンを壁に打ち込み、一気に巻き取って急速発進。壁を蹴って相手の目の前に迫る。突然の出来事に反応しきれなかった残りの敵機全てを斬り捨てた。

「日本に残された希望を、ここで消させはしない！」

ブリタニア軍の第一陣を撃破したライはさらに西進。

奇跡の藤堂、そして四聖剣が死地を脱する為に。新たに迫ったサザーランド十五機の部隊の真只中へ飛び込んでいった。

「中佐！ 進路啓開、完了しました！」

「連絡が取れた部隊も合流を果たしました」

「わかった。よし、ブリタニア軍の包囲網を崩せたか。後は——少尉！ 応答しろ、少尉！」

藤堂は無事、四聖剣との合流に成功していた。

防衛作戦を破った敵軍をライがひきつけてくれたおかげで多くの部隊を撤収している。

本陣が落とされたとの情報が入った時はどうなるかと思つたが、被害を最小限に収めていると言えるだろう。

後は殿を務めているライがこちらへ向かうのみ。

労を労う意味も兼ね藤堂自らライへと通信を入れた。いまだ戦いが続いているのかつながるまで数秒を要した。

「こちら、ライ。まだ健在です」

「そうか。よくやってくれた少尉。こちらの勢力は一掃した。もう十分だ。少尉もすぐに引き上げてくれ」

無事を知り、安堵する藤堂達。

最悪の展開も予想したがどうやらその心配は杞憂だったようだ。

息を零す藤堂達に、しかし命令を受けたライは了承を返すことはなかった。

「藤堂中佐！」

緊張感の籠った、強い声だった。彼らしからぬ語気に違和感を懐いて藤堂は問いを返す。

「何だ？」

「……武運長久を祈っております。どうか日本をよろしくお願いいたします」

「なにつ。おい、少尉！ 少尉!?!」

「少尉！ 早まるな！」

「すでに銃弾が尽き、エナジーファイラーも底を突きます。脱出は不可能です」

藤堂が何度呼びかけようと、千葉達が声を荒げようともしライの現状は変わらない。

すでに月下は長時間の戦闘により活動の続行が不可能となっていた。

敵の攻撃を受けて補給もままならない今となつては、脱出は現実的に不可能なものなのだ。

「中佐と、四聖剣の方々と共に戦えたことを光栄に思います」

とても最期の会話とは思えない清々しい言葉でライは通信を終えた。

「少尉！ 少尉!!」

「藤堂さん！ すぐに救出を！」

「わかつている！」

死を覚悟して戦いを続ける部下を無視はできない。朝日奈に言われずとも藤堂の方針は決まっている。

即座に救出部隊を編成、出撃させようと指示をだす、その瞬間。

最悪の知らせが藤堂の耳に響き渡った。

『伝令！ 白カブトが高速で接近！ 間もなくこちらへたどり着きます！』

「なんだと?！」

「白カブト。スザク君か」

「よりもよつて、こんな時に！」

ユーフェミアの騎士になったというスザク。そしてランスロット。

これまでもゼロの策の最大の難関として立ちはだかり、幾度もブリタニア軍の窮地を救ったナイトメア。

その機体はこちらへと迫っている。まさに藤堂達にとっては悪夢ナイトメアそのものだった。

「藤堂さん。ここにあなたを捕まえます」

相手がかつての師匠であろうと関係ない。スザクは固い決意の元、藤堂の部隊に接近していた。

「——全軍、迎撃準備を整えろ！」

強敵を前に藤堂達は迎撃を余儀なくされる。

これによりライの救出作戦は完全になくなってしまった。

「悪いな月下。お前を巻き込むことになってしまった」

月下の中でライは一人呟いた。

周囲にはサザーランドの包囲網が完成されている。

指示があればすぐに月下を仕留めるため攻撃を開始するだろう。

もはやエナジー切れは目前だ。長く戦う事は出来ない。

せめて藤堂達が逃げ切るための時間を稼ぐ。一機でも道ずれにしてやろうと意気込むライ。

だがその意志を引き裂くものが、ライの視界に映った。

「……カレン、か」

真つ赤に染まる機体はゼロの親衛隊隊長であるカレンの専用機。

目前に迫る紅蓮式式を見て、ライはうつすらと笑った。

「君で最期を迎えられるならば本望だ」

死が近づくと月下の両腕がゆっくりと下がる。

この戦況で紅蓮とサザーランドを凌ぎきる術はない。ならばせめて紅蓮の手で。彼女の手で。

サザーランドも紅蓮の動きに乗じて動き始めるが、そちらには目もくれずに、紅蓮の動きだけを目に焼き付けた。

紅蓮の輻射波動が紅く光る。

あれが直撃すれば確実に機体ごと葬り去ることだろう。

自分の結末を感じ取ってライは体の力を抜いた。

すると紅蓮式はライの予想に反し、月下の横を疾駆していった。

「ん?」

予想外の動きに戸惑うライ。

まさか自分を無視して藤堂達の方へと向かったのか。

驚き、視線を後ろへ向けると紅蓮はサザーランドの一角を攻撃していた。

包囲網の一部が崩れたブリタニア軍。さらに紅蓮の後続機であった無頼もサザーランドを横撃。

空中からゼロが乗るガヴェインも攻撃を仕掛け、瞬く間にブリタニア軍を殲滅した。

「ゼロ。黒の騎士団。どうしてブリタニア軍を? ……いや、どうして僕を」

先ほどまで同調して日本軍を攻めていたはずの黒の騎士団。

そんな彼らがブリタニア軍の包囲を受けていたライを救出した。

理解が追いつかずライが混乱する中。

「黒の騎士団総員に告げる！」

ゼロがオープンチャンネルで黒の騎士団へ号令を発した。

「中華連邦と結託し、日本解放戦線を私物化していた片瀬と澤崎は捕らえられた！ もはやここにいるのは彼らに利用されていた、日本を想う我々の同志だけである！」

「何……？」

「奇跡の藤堂。四聖剣。そして日本貴族の末裔。真に日本を憂える者達がいまだこの戦地に取り残されている。ここで彼らを失うわけにはいかない。黒の騎士団はこれよりブリタニア軍を攻撃。同胞をこの窮地から救い出すのだ！」

「同志？ 同胞だと？」

「黒の騎士団が、我々を守ろうとしているのか……？」

この放送は藤堂の耳にも届いていた。

見ると、どうやら藤堂達を攻撃しようとブリタニア軍も黒の騎士団の足止めを受けているようだ。

言われてみれば黒の騎士団は最初から中華連邦軍やその首脳陣ばかりを狙っていて解放戦線の面々を攻撃していなかった。ライが戦闘を繰り返していたのもブリタニア



軍のみ。

はじめからゼロは解放戦線の面々を中華連邦軍から切り離し、救出することを狙っていたのかもしれない。

「随分と遠回りをしてしまったが、ようやく我々の進み道が重なるのだ。ブリタニア軍を駆逐し、真の日本の姿を取り戻せ！」

そう締め括ってゼロの命令は終わった。

突然の黒の騎士団と日本解放戦線の共同戦線。ブリタニア軍は混乱し、黒の騎士団は勢い盛ん。

戦況変化についていけないブリタニア軍は次々と落とされていく。

ゼロの一声で戦況は大きく変わっていた。

「ライ」

「ゼロ……」

今度はオープンチャンネルではなく、ゼロがライに直接通信を繋げた。

「安心しろ。カレンからお前の話は聞かせてもらった。お前という存在がここで消えるのは惜しい。日本人にとってお前が黒の騎士団に加わることが大きな意味を示す」

「だからもう一度、君の下に着けというのか？」

「お前なら考えずともわかるだろう。自分の一存で、藤堂達が再び窮地に陥ることくら

「い」

「……ッ！」

「それにお前が望まずとも、黒の騎士団への加入を心より願っているものが一人いる」

「素晴らしい残してガヴエインは飛び去っていく。」

「方角を見るとランスロットと藤堂達が小競り合いを続けている戦地だ。おそらくはその援軍として向かったのだろう。」

「エナジーファイラーの残量が尽きた今、ライが彼を追う事は出来ない。」

「じつとガヴエインの背中を見据えていると。」

「ライ」

「カレンか」

「真つ先に駆けつけ、ライの危機を救ったカレンが近寄ってきた。」

「月下は、まだ動くかしら？」

「……エナジーファイラーが尽きた。もう戦うことは出来ない。捕虜にするなら今のうちだよ」

「そう。わかった」

「そう話すライに、カレンは短く答えると紅蓮の懐からある者を取り出し、月下へ差し出した。」

紅蓮の掌に乗っているのはナイトメアのエネルギー源となるエナジーファイラーだった。

「これは、エナジーファイラー?」

「黒の騎士団はこれより、ブリタニア軍の掃討ならびに藤堂中佐以下日本解放戦線の救出に向かうわ。あなたは どうする?」

「カレン……」

手を取って、カレン達と肩を並べて仲間を救出するか。

手を拒んで、何もせずに自分の意地を貫き通すか。

しばしの沈黙が流れる。

ライは数秒の間紅蓮越しにカレンの姿を見据え、そして笑みを見せた。

「了解した。僕はこれより黒の騎士団に協力させてもらう。君の指示の元、共に中佐達を救出しよう」

カレンからエナジーファイラーを受け取って、月下は再びその力を取り戻す。

紅の機体と蒼の機体。カレンとライ。二人が久々に同じ旗の下、共に戦いへ挑んでいった。

「……ようやく、ね」

「ああ」

二人は互いの背を預け合うようにしてその場に座り込んでいた。

紅蓮と月下の両機が二人を覆い隠すように聳えているので周囲の人間から気づかれる事はない。

ライとカレン。二人だけの空間で、このゆったりとした静寂を満喫していた。

「また、あなたと一緒にいることが出来て。日本を取り戻して。本当に夢みたい」

「長かった。だけど確かに、ようやく取り戻せた」

「予想していなかったのはあなたが私の部下になることくらい？ 私、あなたはもつと上の役職につくと思っていたけれど」

「僕は黒の騎士団に戻った。でもまだゼロを信じたわけではない」

「ライ……」

「でも、だからこそ僕はもう一度君を信じることにしたんだ」

ライはカレンの掌にそつと手を伸ばした。

優しく、包み込むように握り締める。

「君がゼロを守るといふのなら、僕が君を守ろう。だから、君は君が信じる道を進んで

くれ。僕もカレンと歩んで行く」

「……………うん。……………うん！」

激しい戦闘の末に黒の騎士団は藤堂率いる旧解放戦線の面々を救出。キュウシユウからブリタニア軍、中華連邦軍を一掃した。

藤堂達は中華連邦軍と決別し、新たな出発を期して『真・解放戦線』と名前を改め黒の騎士団に合流を果たす。ゼロと藤堂、そしてカレンとライが手を交わす姿はメデイアをリークして日本各地に伝えられた。奇跡の藤堂がゼロの元で部隊を指揮し、貴族の血筋を引くライがゼロを立てたことにより黒の騎士団の求心力は大幅に増加。

その後ゼロは制圧したフクオカ基地に拠点を設け、『合衆国日本』の建国を宣言。

藤堂を軍事の総責任者に任命し、ライを親衛隊である零番隊副隊長に任命するなど対ブリタニア戦に向けて準備を重ねていく。

長く、遠い回り道を経てようやく一つにまとまった二つの組織。

道が重なった今、これからは取り戻した日本の為に力を合わせることだろう。